

## 逃 げ 道

—ハイデガーの関—

五十嵐 沙千子

1

昨日、会議があった。  
だが、この「あった」は何を指すのか。  
昨日、授業があった。  
この「あった」は何を指すのか。

昨日会議があった、というとき、この「あった」は、会議が存在した、ということ指しているように思われる。「会議というもの」が「存在した」、というふうには。「会議」が昨日「あった」のだ。会議は昨日、西日の入るあの広い会議室で「あった」。そのとき配られた資料もまだ机の上のここにある。

同じように、われわれは、昨日授業があった、とすることができる。今日授業がある、ということも、あるいは、明後日試験がある、ということも、また来月コンサートがある、ということもわれわれにはできる。それらはみな、同じこと、つまり、「会議というもの」、「授業というもの」、「試験というもの」、「コンサートというもの」が存在した（存在する、存在するだろう）ことをあらわしている。

だが、この「ある」とは何か。

「会議」や「授業」や「試験」は「ある」。だがそれは、もちろん「存在するもの」ではない。「会議という<もの>」が「ある」わけではない。それは、目の前にある昨日の資料、あるいはこのパソコンのような仕方で存在する<もの>ではない。同様に「授業という<もの>」、「試験という<もの>」、「コンサートという<もの>」が「存在する」わけではない。それは自明のことだ。

だが、会議は「ある」。それもまたわれわれには疑い得ないことである。

会議が「ある」というのは、会議を「する」ということである。明日会議が「ある」、というのは、明日、会議を「する」ということであり、今日授業が「ある」、というのは、今日授業を「する」ということ、授業が「なかった」というのは授業を「しなかった」ということである。「試験」も「コンサート」も同様に、それらが「ある」というのは、その場所でそのことを「する」ということ、その「ある<何>か」とは「する<何>か」である。この場合、「ある」と「する」は同じことである。

では、会議を「する」とは何なのか。

たとえば昨日われわれは会議を「した」。だが実際に「した」ことは、ほとんどただ黙って座っているということだけだった。すなわちわれわれはほとんど何も「して」いない。

だがそれにもかかわらず、それが実は会議を「して」いた、しかも「正しく」「して」いたということなのだ。

奇妙なことに、正しく、われわれは、その場で黙っていた。椅子に座って黙って最後まで、あるいは席を離れてもよい正当な理由が見つかるまで、われわれは、正しく、ただ目と耳を開けて沈黙して時間が過ぎるのを待っていた。それが「議長ではないわれわれ」がある意味で「正しく」会議を「する」ということである。これに対して、聞かれてもいないのに長々と話すこと、他の誰も笑っていないとき、時ならぬ時に笑うこと、自分が納得していないということをいつまでも言い募ること、これらはすべて、「正しく」会議をしている人々の眉を顰めさせるアクシデントであり、「正しくない」振る舞いなのだ。「正しい」のは、議長とその都度の議題に関係する一人二人が、つまり語るべき立場にある人が語るのを礼儀正しく聞き、冗談に対してはきちんと、適切な声の大きさで笑い、「困った問題」に対してはため息をつく、というふうには、「する」＝「ある」ことである。実際に昨日のわれわれはそうしていた。そして、そう考えるわれわれは、昨日の会議に「正しく」参加していた＝その場にいたのである。

だが、もちろんわれわれはその場にいなかったのだ。

会議が「ある」ということ、それが何を意味するのかをわれわれは知っている。それは一つの「命令」である。「会議」であれ「授業」であれ、あるいは「コンサート」であれ「飲み会」であれ、それが「ある」というのはどういう意味なのか、それをわれわれは知っている。それが「命令」であることを、またいかなる「命令」であるのかを、われわれは知っている。昨日の会議でわれわれが「正しく」黙り、あるいは語り、あるいはじっと時間が過ぎるのを待っていたのもそれだからである。われわれは命令に従っていたのだ。われわれが「正しく」「ある」というのはそういうことである。それはわれわれがその都度のその場所の命令を理解しそれに「従っている」ということ、この場所が「何」なのか、あるいは今が「何」なのか、つまりわれわれがどう「する」場所なのか、どう「し」なければならないのかを知り、それに従って自分のあり方を決定しているということなのである。

こうしてわれわれは「会議が<ある>」に従う。つまり「会議がある」という命令に従う。それは、「会議をしろ」という命令、いやもっと正確には、「会議がある」という状態に「あれ」、という宣告である。われわれにとってそれは、「会議にある」という指示されたあり方の中に入る、それを自分自身のあり方として受け入れる、それに同化するという命令に他ならない。

「場」に基づいたこの命令こそがわれわれの「あり」方を決定する。それがわれわれの「存在」を構成する。まことにわれわれは、現にここ (da) = 「場所」が「何」であるかをわきまえてその都度の自分のあり方 (Sein) を決定している者 = 現存在 (Da-sein) なのである。

会議が「ある」、と言う。そうすればわれわれは正しくそれを受け取る。授業が「ある」と言う。これももちろんわれわれは正しくそれを「する」＝それに「従う」ことができる。「する」とは「従う」ことである。「場所」がわれわれを決定する。

われわれは「場所」の命令に従う。むしろわれわれは自ら進んで、嬉々としてその中に飛び込んで行くようにさえ思える。われわれ自身が、存在するために「場所」＝「ここ」

に頼っているのだ。もしこの場所が「何」で「ある」かがまったく分からなかったら、われわれは途方にくれてしまうだろう。それこそわれわれはどう「すれ」ばよいか、この「ここ」で自分が「何」で「ある」のか、どう「あれ」ばよいのか分からなくなってしまうだろう。「場所」を見失うことは、自分自身の「何」で「ある」を失うことだからである。実際、われわれは自分の声のトーンも服装も表情も言葉遣いも、「適切な」ものの方や考え方も、食べ物の趣味も自分の感情さえも、自分が置かれたその都度の「ここ」にふさわしくセットしているのだ。それらの「場所」はいつもわれわれに先立って既に決まっている。その都度われわれが「いる」場所、この場所 = 現にあるここは、どんな場所も、われわれに先立っていつもすでに決まっている。だとすれば Da-sein としてのわれわれの「あり方」も、われわれ自身に先立っていつもすでに決定されている = 与えられているということになる。われわれはそれに従っていればよいのである。それが「正しい」ということである。それに反しようなどとどうして思えるだろう？むしろわれわれは自ら、自分自身を「ここ」にふさわしいものにするべく、いちはやく「場」を見て取り、いちはやく「場」に当て嵌まるよう奪取しているのである<sup>1</sup>。それはもはや一刻の猶予も自分に許さないほどである。

ぼんやりして、自分自身の「正しい」あり方を取り落とすことがあってはならない。迷

<sup>1</sup> この場所が「何」なのかということ、この場所の「存在」は、場所それ自体から知られるものではない。たとえば「2D401」という名前と呼ばれているひとつの大きな部屋で、あるときは「会議」が、あるときは「授業」が、またあるときは「試験」が「ある」。一つと同じ空間に、「会議」も「授業」も「試験」もが「ある」ことができる。つまりそのおなじ「教室」で、あるときは「会議」を「し」、別の時間には「授業」を「し」、また違う時には「試験」を「する」。その「する」ことにしたがって、その都度この場所が決定される = この場所が生まれる。こうしてわれわれは、会議が「ある」その場で、正しく「会議」を「し」、また「授業」が「ある」その場でわれわれは正しく「授業」を「する」のである。

こうしてその場所の外観が生まれる。場所は、われわれの「する」こと、そう「している」われわれ自体によって生じ、現象する。

おそらくそれはサッカーやバスケットボールといったゲームと同じである。

空き地でボールを蹴っている子供たち、時々勝利のダンスを交えながら巧みに足を使っている子供たちの上にはサッカーが「ある」。われわれは疑いなくサッカーをそこに見ている。だがその時、一人の子供がそのボールを手に取り、二三歩ドリブルして両手の手首をそらせながら離れた別の子供に投げた瞬間、まさにその瞬間、その場はバスケットボールが「ある」のだ。さっきまでのサッカーと今のバスケットボールの非連続を受け入れることができないとしても、あるいはその突然の非連続を拒むとしても、むしろその拒否自体が、その場がすでに変わってしまったことを、さっきまで「あった」サッカーがすでに「なく」、今はバスケットボールが「ある」のだということ、その場所が今はすでにバスケットボールの場になっていることを承認しているのだ。

こうして正しくわれわれは空間を使うことができる。

空き地のサッカーとまったく同様に、同じ一つの「教室」で、あるときは「会議」が「あり」、別の時間には「授業」が「あり」、また違う時には「試験」が「ある」としても、われわれは「会議」「授業」「試験」というそのそれぞれを正しく「する」ことができる。それらを正しく「あらせる」ことができる。ひとつの同じ空間が、時間によって、違う空間になるのだ。ひとつの同じ空間が、まったく異なる、複数の別の空間で「ある」のである。複数の「もの」が「ひとつ」のなかに詰め込まれている。ハイデガーは言う。「いろいろなものは、それぞれ自分の場所を持っている。この場所的なく空間>の中へ、生成するものは、入れられて成立し、そこから外へと際立たせられる。しかし、このことが可能になるためには、<空間>は、あらゆる種類の外観を欠いていなければならない。もっとも<空間>は、どこからか外観を受容できうるものでなければならないのだが。なぜなら、もしも<空間>が、その中に入ってくるいろいろな外観のどれかに類似していたとすれば、その外観に対立する形や、それとはまったく別の形の受容に際して、原型を下手に実現することになっただろう。なぜなら、<空間>は、その際には自分自身の外観を、一緒に現れさせてしまうだろうからだ。」(EM S.50)

っている暇はない。この「場」の規範の「正しさ」と「適切さ」の網から外れたら、もしそんなことになったら「終わり」なのだ。自分は「ここ」から外されてしまう。居場所を失ってしまう。「向こう側」に、「外」に、生き延びが保障されているこの安全なこちら側から外に、恐ろしい「外」に、追いやられてしまうだろう。その外は生き延びの外、つまり「死」の外なのだ。だからこそわれわれは「ここ」 = da にしがみつのである。

われわれの図式は非常に単純なものだ。われわれにとって問題なのは「中」か「外」かなのだ。それは生き延びの「中」であり、死の「外」なのである。

こうしてわれわれは「場」の中に隠れる。ほんの少しでもはみ出さないように緊張して自分を見張っている。追い出されることはできない。自分の不適切さを周りから注視され、「ここ」から追い出されることはできない。だとすれば、「隠れる」=「従う」しかないではないか。隠れることがこの場合の唯一の逃げ道なのだ。

常に周りの様子を窺いながら、自ら服したその「場」の命令の中に、その命令が指し示す正しい「あり方」の中に、するりと入り込んでしまうこと。それは、自分を「守る」ことの、つまり隠れることの、あるいはしがみつくことの最も正しいやり方なのである。われわれにしてみればそれはもはや「束縛」でさえない。従えば従うほど、同化すれば同化するほど自分の「正しさ」は確立する。入り込めば入り込むほど自分自身の居場所は確保されるのである。

だがそうしている限り、それは自分ではない。そこに「いる」のは自分ではない。息を殺して「場」のあり方の中に従っている限り、一瞬の隙もなくそれに同化している限り、それはなんとしても、自分として「ある」というあり方ではない。だが、この「ではない」は、「ではない」という仕方、ひとつの場所を、「隠れているもの」が「ある」のだという、つまり補集合の領域を指差している。それは不在する私という場所である。

「場」の規範=あり方に同化するというこの強制は、この不在する私の欲望において生起する。この「に」がその欲望の場所である。それは欲望の主体が私自身であることを、「隠れること」=「私の不在」は私の欲望であったということ露わにする。

他人が私を閉め出す前に、私を閉め出していたのは私自身だったのだ。私が私を殺していたのだ。私は、私の生き延びのためにそうしていたのである。

「場」は命令である。

そこにいる限り、そこにいるという仕方では私は私を殺し続けるだろう。だが、そこにはない、という可能性はない。その外、「場」の外は私の「死」の外、絶対的な非-存在の場所なのだ。

だから「場」にいることは必然である。

私は「場」の中いなければならぬ。しかも「場」は無数にあるのだ。

どこにいてもわれわれはいつでもその無数の「場」の中にいる。むしろわれわれは生きている限り「場」を渡り歩いているのだとさえ言える。生きている限り無数の「場」が、いつでもわれわれを待ち構えているのである。

逃げ道はないのだ。

2

ところが、ハイデガーは「現れ出よ」と言う。  
「隠れないこと」が「真理」なのだと、だから「光の中に立て」と彼は言うのだ。  
だが、そんなことができるのか？

もちろんそれは可能である。だがそれはいつも私の死と引き換えである。そしてハイデ  
ガーが言うのはまさにこのこと、つまり死へへと生きるるということに他ならないのである。

まずハイデガーはこう言う。

寝起きする場所を見つけ、生計を立て、暮らしを営んで行くという目的のために、現  
存在のもっとも身近な不断の諸可能性が繰り広げられるのだが、自分の存在へとか  
かわることが問題であるこの存在者は、こうした諸可能性をめぐって、その都度す  
で自分を企投してしまっている。自分の「ここ Da」のなかへと被投されているので、  
現存在は、何らかの特定の自分の「世界」へと現事実にその都度差し向けられてい  
るのである。このことと共に、もっとも身近な現事的な諸企投は、世人の中への配  
慮的に気遣いつつある自己喪失によって導かれている。(SZ S.297)

生き延びていくためにわれわれは当面のさまざまな「場」の中にはまり込んでいる。そ  
こに何の疑いもなく自己を放擲している。それは上で述べた通りである。それは仕方の  
ないこと、他にどうしようもないことなのだ、生きて行くためにはそうしなければならない  
のだ。そうわれわれは自分に言いきかせながら「被投的に頹落しつつあるものとして自分  
を自分自身に閉鎖している」(SZ S.286) ののである。

自分自身を閉鎖するのと自己を喪失するのは同じことである。それは自分の声をなくす  
ということ、置かれた場所に黙って従うということである。疑いを持つてはいけないのだ。  
声を立ててはならないのだ。疑うことは、してはならないこと、危険なことである。問う  
ことはこの安全な地平を離れること、それを捨てることなのである。だからハイデガーは  
言う。「もしも、われわれが思惟しつつ探求しながらこの問いの方向へと赴くならば、そ  
のときには、われわれはまず、存在するものの慣れ親しんだ領域のどこに留まることもす  
べて放棄するのである。われわれは、日常の秩序に即した事柄を超えていく。われわれは、  
慣れ親しんだことがら、日々の生活のなかで秩序づけられた秩序的な事柄を超えて問う」  
(EM S.10) のだ、と。つまり「この問いを問うこと自体が、秩序の外にある」(EM S.10)  
のだ。

問うことは、当然のことながらこのわれわれの秩序の外に出ることなのだ。それは何よ  
りもまず「外に出る」ことでなければならない。だが、それはわれわれ自身をこれまでの  
われわれのあり方から、場の規範に従ったままの自分自身のあり方から自ら断ち切るこ  
とを必然とする。だから「問うことは、ただ跳躍において、そして跳躍としてのみ、成立する。  
それ以外には全く成立しない」(EM S.45)。実に、問うという「その跳躍によって、人間

は、自分の現有のあらゆるかつての安全性から、その安全性が本当であるにせよ、思い込みにすぎないにせよ、跳び下りるのである」(EM S.45)。

この跳び降りの場は常に目の前にある。従っているこの「ここ」は、「従っている」というその私自身の行為において可能的には同時につねに跳び降りの場、あるいは私自身に跳び降りを迫る急迫の場である。だが、だからこそ、「ここ」でわれわれはいつも立ち竦んでしまうのである。むしろわれわれは急いで自分に疑いを閉鎖する。・・・仕方がないのだ。そもそも他にいったいどんなあり方が可能だというのか?「従う」というあり方と引き換えに「中」の居場所が与えられるのだ。だから仕方がないのだ。

この、おそらく生きている限り永遠に繰り返される遮断の中で、われわれは、会議の場では会議の場の命じる通り、電車の中では電車の場が命じる通りに自分を構成し、当て嵌め、疑いを閉鎖し、自分を閉鎖する。「場」の命令に疑問を持つてはならない。声を挙げてはならない。疑うこと、「ここ」での別のあり方を探すことさえすでに「場」に背くことなのだ。それは「従う」というあり方を破るだろう。それは「ここ」の居場所を自分で拒むことに他ならない。「従う」しかない。たとえそのあり方が自分を拉ぐものでしかないとしても、「ここ」を出て行くことはできない。

こうしてわれわれは生き延びのために疑いを放棄し、自分の声を放棄し、同時に自分自身を放棄するのである。

だが同時に、その言い聞かせのリフレインは、言い聞かせなければならない誰か＝私が、それでも常にそこにいることを示唆している。あるいはこう言ってもよいだろう、その言い聞かせが存在している限り、言い聞かせを必要とする構造があるのだ、と。言い聞かせが存在している限り、その背後には言い聞かせを必要としている私、リフレインを続けないと「中」を疑いかねない、それを問いかねない私がいるのだ。あるいはむしろそのリフレインは、喉元まで出かかった問を飲み込む私の音のない声の余韻なのだ。

その私の上に「外」＝「死」が現象している。自ら問を遮断する私、恐れながら問を自分自身に遮断しなければならぬ私、言い聞かせなければならぬ私の上に、この遮断の上に、この安全な見渡せる「中」がまさにこの私自身によって覆される可能性が、この暖かい、隠れていた「中」から闇の「外」へ自ら跳び降りる可能性が、つまり「死」の可能性が立ち現れてくるのである。

この私は不気味である。

絶えず言い聞かせによって問を封じ続けなければならない私は不気味である。それは「死」への境界を開く者である。それは問によって私自身の「死」への境界を開く者、われわれの「中」と自分自身とに対して「暴力を振るう (gewalt-tätig)」者<sup>2</sup>である。開かれるのは私の死なのだ。追い出されるのはこの私自身なのだ。それなのに私は遮断すると

<sup>2</sup> ハイデガーは言う。「われわれはここで、力を振るうこと (Gewalt-tätigkeit)」という言葉に一つの本質的な意味を与える。この本質的な意味は、根本的に、この語の通常の意味を超えている。そういう通常の意味では、この語はたいていの場合に単なる粗野や恣意のようなものを意味している。この通常の意味で力を見ている領域においては、和解への約束や相互の配慮が現有に尺度を与え、したがってあらゆる力は必然的に、単なる妨害や加害として否定的に評価されるのである。」(EM S.115)

いう仕方で問を保持し続けているのである。むしろこの関—しがみつくと「中」と死の「外」の関—が人間の場所なのだ。その関—の上に、われわれはいるのである。だからこそ「人間はもっとも不気味なものである。なぜなら、彼は、単に非-故郷的なものとして理解された不気味なものの中でおのれの本質を費やすばかりではなく、さしあたり、たいてい、慣れ親しんだ故郷的な限界から外へ歩みでて出動するからである」(EM S.116、傍点引用者)。

この不気味さが私の本質である。「人間は、一言でいえば、もっとも不気味な者」(EM S.114)である。この不気味さ、つまり自分の死の「外」へ行くということ、限界から歩み出ること、もちろん、ときおり生じる付加的な性質などではない。「人間はもっとも不気味なものである」というこの言葉は、あたかも人間がそれ以外の何か他のものでありうるかのように、人間にある特別の性質を帰そうとするものではない。むしろ、この言葉の語ることは、もっとも不気味なものであるということが人間というものの根本特徴であり、この根本特徴の中につねにすべての他の諸特徴が書き込まれねばならない、ということなのである。」(EM S.116)

この安全な閉ざされた私の「ここ」を自分の間によって破り、この「場」=自らの居場所を自らの間によって蹂躪することを、そして自らの問いによってこの「ここ」から「外」へ飛び降りることを私はどうすることもできないのだ。この関—から自らの死へ自ら行くこと、それを私はどうすることもできないのである。

こうして私は生き延びの「ここ」から出て行く。出て行かざるをえないのである。

だが、そもそも、この「中」に、「ここ」に私の居場所があったのか？

確保されたはずのこの「ここ」は、私が私自身を放棄することを条件として私に開かれていたのだ。私が私として存在しないこと、私が私を殺し、私自身を隠して「場」の命令のあり方に自分を放棄すること、それが、私が「中」にいる条件だったのだ。

だとすれば、この「中」の「ここ」にはもともと私の居場所など無かったのだ。自分を隠さなければいることができなかった「ここ」に、もともと私は不在だったのだ。どこに行こうが、「場」の「中」に入るといふこのあり方においては、私は存在していなかったのである。

それが私の「場」のアポリア、すなわち逃げ道のなさだったのだ。

われわれは「外」を回避して「中」にしがみついてきた。自分自身の死の「外」から逃れて、「中」の「場」の命令に従ってきたのは、そうすればわれわれの「死」の可能性を消去することができる、とわれわれが信じたからである。

だが、このわれわれの恐れる今において、この今、この瞬間のリアルな可能性として、「死」はわれわれにとって「外」として現前している。「死」は絶えずわれわれの前にある。われわれはまさに「死」から目を背けるという仕方で、絶えず「死」を携え続けてきたのだ。それはまるで、自分の手に握りしめた見てはならない手紙を、けっして見てはならないものとして握りしめ続けて遠い道を行く子供のようなだ・・・かれは手紙に—「死」に一撃がられているのである。撃がれてかれは、かれの行く遠い道を、咲いているどんな花も他のど

んな景色も見ることなく、ただ手の中の手紙に繋がれて俯いて歩いて行くのだ。握りしめる手紙が、その手紙への恐れが、歩く子供を、あるいはかれが見る世界をかれから遮断し、その手を開いて花を摘むことも、花を見ることからできなくさせているように、われわれにおいても、われわれ自身の「死」への恐れが、われわれをわれわれ自身から、そしてわれわれの世界から塞いでいる。「外」という形で現在する「死」の影の下で、その「死」の恐れの下で、われわれはどんな「場」の中でも、まるごとの私として存在することができなくなっているのだ・・・しかもそれはわれわれをつねに「死」に縛り付けるのである。

子供は本来、歩く道を見、世界を見、どこにでも歩いて行き、花を摘むことができるはずである。われわれにしたところで、本来われわれは、「場」が命じる「あり方」に区切られることなく、われわれ自身を隠すことなく、われわれ自身としてどんな「場」にも生きることができるはずである<sup>3</sup>。それは可能性としてそうなのである。そうできる可能性を持っているということがわれわれの本来である。だからこそわれわれはその可能性を遮断されることができるのだ。

実際、われわれは遮断されている。あるいはわれわれは自分自身を遮断している。死への恐れと死の回避がわれわれのこの遮断を支配してきたのだ。それがわれわれのあり方を、限られた、隠れたものにしてきたのである。全面的に、まるごとの自分として生きることが自分自身に遮断して、われわれは、この「場」の中で許される自分、承認される自分だけに自分を限定してきたのだ。結局のところ、われわれは、死を避けるために、あらかじめ自分を殺してきたのである。

隠れていれば「死」を回避できるというのは不安が生んだ妄想でしかない。

死はむしろこの現の場にあるのだ。現に「ここ」で隠れている私の恐れの中に、「外」＝「死」はあるのだ。「外」＝「死」は私の恐れの中にしかないのである。それは「外」＝非-存在の領域に属するもの、存在しないものなのだ。実際に存在するのは「死」ではなく「死の恐れ」である。実際に存在するのは、「外」ではなく「中」の「ここ」であり、「死」ではなく「死」を恐れて隠れているこの「ここ」の私のあり方だけなのである。

その「ここ」を現にはあらぬ死が、この「中」を現にはあらぬ「外」が支配しているのだ。

確かなことは、「ここ」を離れたら死ぬということではなく、現にはあらぬ「死」の恐れの中で、現に私が「ここ」で自分を殺していたということ、本来生きられる唯一の現の場である「ここ」で、私がそもそもまったく生きていなかったということである。

現実にあるのは、「死」の恐れの中で私が私として全面的に存在することを奪われていたということ、「死」の恐れゆえにただこの現の「場」で私が自分自身を隠し、限定してきたということ、そのことだったのだ。

だとしたら、なぜ私は隠れなければならないのか？

<sup>3</sup> もちろん、この「本来」という言葉は、実体的本来性を指すものと誤解されてはならない。すでに本論文中でも描かれているように、この語もまた「ではない」という形において、つまり、ネガティブな意味において理解されなければならない。この場合において言えば、「限定」は「全体」を前提する。とすれば、「限定」が「全体」を、あるいは「限定された現在」が「限定されていない本来」を暗示的にはあれ証左する、ということである。



## 3

ハイデガーは「現れ出よ」と言う。むしろそれは当然である。

たしかにそうすることで私は「外」に出されるかもしれない。

だがもうその前に、今現に、私はこの「中」ですでに死んでいるではないか？「外」に出てはじめて死ぬのではない、もうすでに、とっくの昔から「ここ」で私は死に続けてきたではないか？たしかなことは「外」に出されるかどうかということではない。たしかなことは、「ここ」で私はもうすでに死んでいるということ、「外」ではなくまさに「ここ」が私の死の場所であるということ、しかも「ここ」が唯一私のいる場所である、ということなのである。

隠さないことで、あるいは場の命令に「従う」というあり方を放棄することで、私は「外」に出されるだろう。私は私の間によって「場」を壊すからである。われわれにたえず「適合と調和を強いる、適合させる構造 (fügendes Gefüge)」（EM S.123、傍点引用者）に、私は「絶えざる抗争」を、「隠蔽、遮蔽、仮象に対する戦い」（EM S.146）を持ち込むからである。黙って自分の間を放棄している人びとの間に、私は声を持ち込むのだ。私は「暴力を振るう (gewalt-tätig) 者」である。おそらくハイデガーが言うように、私は「竈と集会から排除されねばならない」（EM S.126）者なのだろう。

だがここが私の場所である。

私はこの関の上にいるのだ。

私の関は明白である。それは、「ここ」で死に続けるか、それともこの「ここ」で、「ここ」の中で生きるか、という関なのである。それは、別の「どこか」ではない。この「ここ」に、「彼らのここ」「区切られた<場>としてのここ」ではなく、今、その都度の今、私がいるこの「ここ」で、私が歩いて行くこの足に従って生起するその都度その都度の連続する「ここ」、私が生きて行くその都度その都度のこの私の「今」において、この私の「ここ」において私が生きているかどうか、生きていくかどうか、という、それは私の関なのである。

それは私自身に対する戦いである。隠れてきた私が、自分を隠さないでここに立つための、それは私自身に対する戦いである。それは自分自身の恐れとの絶えざる戦いでもある。それは、私自身が死へと生きるということに他ならない。死に開かれるというのは、「死」に対して開かれることではなく、この生の「場」の中で開かれるということ、生き延びの恐怖の鎖を外してこの場で生きるということなのだ。それは死へと生きるということに他ならない。「人間は、問いながら生起する (geschichtlich) 者として、初めて、自己自身に到来し、自己である」（109-110）のだ。

まるごとの私とは何か。

それを私はまだ見も知らないのである。

おそらくそれは知られないままだろう。

まるごとの私がいかなるもの「である」のか。生起してくるそのもの、到来するもの、到来してくるものとしてまだ存在していないもの、私の未来であるものそのものを「であ

る」という現在形に置き直すことはできない。できないままに、まだ来ていないその到来 = 未来は、この現在を私に固定することを解除する。同時にそれは、私がいまあるこの場とこの場に所属する他者たちを、やはり現在形で見ることから解除するだろう。

怯みながら、私はこの私の関の上に立ち続けることができるだろう。

そして怯みながら、私と同じようにこの関に立ち続ける別の私を、私は待つことができるだろう。その恐れる別の私と、私は出会うことができるだろう。そして私と、到来してくる世界とを、私は待つことができるだろう。

人間存在への問いは、いまや、その方向と射程において、初端の秘かな指示に従って、存在が自らの開示のために必要とする場所として、把握され根拠づけられなければならない。人間は「それ自身において開かれたそこ」である。この「そこ」のうちに存在するものは入り込み、作品となる。それ故に、われわれは言う。人間の存在は、言葉の厳密な意味で、〈現 - 存在〉である。存在の開示のこのような場所としての現 - 存在の本質のうちに、存在の開示のための視線は、根源的に基礎づけられていなければならない。(EM S.156、傍点ハイデガー)

本来的に課せられているものは、われわれが知らないあのものである。それを、われわれは、真正にすなわち課せられたものとして知るかぎり、つねにただ問いながら知るのである。

問うことができるとは、待つことができるということであり、生涯待つことができるということさえある。(EM S.157)

\* 文中の略語は次の通りである。

EM : Heidegger, Einführung in die Metaphysik, Walter de Gruyter, 6<sup>th</sup>, 1998.

SZ : Heidegger, Sein und Zeit, MAX NIEMEYER, 19<sup>th</sup>, 2006.

The name of “the hidden”, the name of “being”  
—Heidegger and “coming-future”—

Sachiko IGARASHI

The theme of this paper is about Heidegger's concept “the hidden”, which is described in “Einführung in die Metaphysik” in 1930. This book bridges between early and late period of Heidegger. In this book, he discussed about an issue what “whole being” is. I clarify his concept with regard to Geschichte (history) or Wahrheit als Unverborgenheit. “We human beings, as wandering appearer, for the first time, come to ourselves, and so are “I””, Heidegger said. I tried to make clear this relationship between “the hidden” and “history”, that was misunderstood from the view point of totalitarianism. Only by getting over this problem, we can get the sight that we must not overlook about an essential problem for Heidegger.